

築城原（築上郡築城町と行橋市新田原）で二万の大友勢を破つた大内勢は、馬ヶ岳城攻撃に移った。新田は、全軍をあげて籠城と決まった。

馬ヶ岳籠城の兵は二八〇〇余、大内勢は二万余騎、到底抵抗できる兵力ではなかった。

十二月二十八日、最前線の妙見の陣が破られた。矢留坂の陣も無残な敗北。義氏は、相次ぐ敗戦の報にも動ぜず、「馬ヶ岳は西国名城の一つ。敵何十万騎攻め来ても簡単には落ちぬ」と将兵を激励する。

大内勢は、一気に攻め落とせと四方から関の声をあげて攻めかかる。城兵は決死の形相で大内勢を迎え撃つ。

大石を転がす。這い登る敵に矢を射かける。城兵の果敢な抵抗にもかかわらず、城攻めは猛烈を極めた。

悪戦苦闘の末、大内勢は本丸にとりつき櫓に火が掛けられた。

義氏は、大内盛見に降伏を申し入れ戦いは終わった。

朝からの合戦であったが、日が暮れて天候は一変、大雪となったという。

永享三年（一四三二）六月、中国の雄大内盛見は、二丈岳城（糸島郡二丈町）の合戦で戦死した。

大内氏の後継者に大内持世がなり、大内盛見の嫡男掃部頭かものかみ教幸は後を継げず、家督相続に不満を残した。その教幸の居城

が馬ヶ岳城であった。

文明元年（一四六九）、少式嘉頼、教頼が謀反を起こした時、大内教幸は少式に味方して馬ヶ岳城に籠もった。

十二月二十三日、大内持世の子、大内政弘の命を受けた長野五郎義信、千手信濃守冬通らに攻められた。

文明二年（一四七〇）正月十五日、教幸は、防戦に努めたが力尽き、加嘉丸、獅子丸の二人の子を殺し、教幸も自害し落城してしまった。

天正六年（一五七八）、長野城主であった長野三郎左衛門助盛の居城となった。

天正十五年（一五八七）、豊臣秀吉は九州平定の際、当城に立ち寄り宿舎とした。

九州平定後、豊前国は黒田孝高（如水）の領地となり、孝高、長政父子は、中津城（大分県中津市）完成まで馬ヶ岳城を居城とした。

慶長五年（一六〇〇）には、細川忠興の持城となり、元和元年（一六一五）の一國一城令により、この豊前の名城といわれた馬ヶ岳城は廢城、破却されてしまった。

二 宝山城 行橋市大字宝山

JR行橋駅の南三キロほどの、今川小学校の北側に位置する王埜八幡宮の社地が城跡である。

王莖八幡宮の宝山台地は、標高一六〇メートル、周囲の水田との比高差約八〇メートルである。

東西五〇メートル、南北一三三メートルほどの長方形平地で、上の段、下の段の地名が残り、城台の西側に三段の腰曲輪が残っている。

以前は、台地の周囲に濠が残っていたが、現在は埋め立てられてしまっている。

城跡の西、六〇メートルほどの所に井尻川、東側には旧今川の古川低地があり、在城時代には、外堀の役割となっていた。

城跡は、東側の今川を東の防御線とし、北から下馬場、中馬場、上の馬場の地名が残っている。

貞和年間（南北朝時代、一三四五〜五〇年）馬ヶ岳城の出城として、宝山伊豆守が築城し、宝山城と称した。

豊後守護職大友氏は、嫡男氏鑑に家督をゆずらず、甥の親世を後継者とした。

これは、大内義弘の妹が親世の内室ということで、義弘が將軍義満に働きかけ、幕府の圧力に氏時が屈したためである。

氏鑑としては大いに不満である。

豊後、豊前の武将は氏鑑に同情し、協力を約束する。

当時、豊前の守護職は、大内義弘であった。

応永五年（一三九八）、氏鑑は豊前諸城主を味方に引き入れ、大友親世に反逆を企てる。その中に、障子ヶ岳城主足利駿河守、馬ヶ岳城主に新田上野介とともに、宝山伊豆守の名があ

る。『両豊記』

天文年間、新田氏の一族、安東市次郎重秀、安東万次郎などが城主であった。『豊前古城記』

永祿年間（一五五八〜七〇）安東右馬頭長好が城主であった。

天正七年（一五七九）、菟島合戦で、宝山城主安東長好は、馬ヶ岳城主長野三郎左衛門助盛と同心して、杉重吉の籠もる菟島城を攻略し、攻め落とした。『両豊記』

宝山城の廃城年代は不明である。

三 高来城 行橋市高来・入覚

高来城跡は、椿市小学校の西約二〇〇メートルの、高来天聖寺の南約二〇〇メートルの池部台地上にある。

高来集落の北西にある、峻嶮の塔ヶ峰から南東にのびた舌状台地（標高六〇メートル）に築かれた山城である。

城跡は、東西一二〇メートル、南北三〇メートルほどで、高来と入覚の境界に位置する。北側に二段の腰曲輪と切岸がよく残り、南側は急峻な断崖となる要害の地相である。

高来城に関する文献は少なく、応永五年（一三九八）、中国の雄大内盛見が、豊前に攻め込んだとき、高来城主足利尾張守忠氏が内盛見に味方して従軍したという。『両豊記』

城跡の北にある大行事地区から、高来一带には、倉谷、別所、追殿、居屋敷などの地名があり、城跡や居館との関係を思